博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	朝日 眞美子
論文題目	源氏物語の表現と和歌 後撰集を起点とした展開
論文審査担当者	主 査 中前 正志
	審査委員 大谷 俊太
	審査委員 坂本 信道
	審査委員 滝川 幸司

本論文において主に評価すべきは、『後撰集』の和歌と『源氏物語』の表現を比較検討し、『源氏物語』の和歌表現だけではなく、登場人物の心情をも細やかに分析して、『源氏物語』の本質的な部分にまで説き及んだことにある。

本論文は序論、本論第一編・第二編・第三編、結論から構成される。それぞれに『源氏物語』からキーワードを取り上げ、その表現と『後撰集』和歌を比較検討している。

本論第一編では「うつせみ」を取り上げる。その第一章では、光源氏の「うつせみの身を変へてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」（空蟬巻）歌において、「うつせみ」が「身」を変えると表現されたことの意味を、次の通り解析する。通説では「うつせみ」が「身」を変えると、蟬の幼虫が抜け殻になること、つまり、幼虫が脱皮して抜け殻という痕跡を残すこととして捉えられているが、『源氏物語』や他の文学作品の用例を検討すると、「身」を変えて、それ以前とは違う身の上になることを表現している。これらの用例を踏まえれば、「うつせみ」が「身」を変えると、通説のように蟬の幼虫が抜け殻になるのではなく、幼虫（殻をかぶった身）が成虫（羽のある身）に変わることであると考えられる。よって、光源氏の歌では、空蟬の君が脱ぎ捨てた小袿のみに執着するのではなく、去ってしまったこの女性に、なおも思いを寄せる光源氏の心情が描かれている、と解釈される。第二章では、衣の喩えに「うつせみのから」という言葉を用いた『後撰集』所収の平中興女の歌「いまはとてこずゑにかかるうつせみのからを見むとは思はざりしよ」（恋歌四）とその歌に対する返歌、「忘らるる身をうつせみのから衣返すはつらき心なりけり」（同、源巨城）を取り上げ、この贈答歌が詠まれた背景と、歌の詠み手である男女の心情について論じ、第一章で検討した光源氏の心情と比較する。『後撰集』の贈答歌はお互いに相手の冷淡さを問題視しているが、『源氏物語』の場合は、『後撰集』贈答歌と同様に衣の喩えに「うつせみ」を用いているものの、お互いに相手を慕わしく思う心情が表現されており、『後撰集』の男女間の冷淡さとは異質であることを指摘する。

第二編では、人に嘲笑されることを意味する「人笑へ」を取り上げる。第一章では、『源氏物語』の「人笑へ」（「人笑はれ」も含む）の合計五十八例の用例を検討し、それらにおける主体に着目して検討する。『源氏物語』の第一部、第二部では「人笑へ」を気づかう主体の多くが娘の父親で

あるのに対し、第三部では娘の母親や、大君、浮舟など、ほとんどの用例において女性が主体となっており、さらに東屋巻以降では主体がすべて女性で、それらのうち半数は浮舟が自己の「人笑へ」を危惧する例である。そのように、第一部から第三部にかけて「人笑へ」を気づかう主体が変化していることに注目する。そのうえで第二章では、『後撰集』において「人笑へ」が詠まれた二首の歌と、『源氏物語』に見られる浮舟の「人笑へ」をめぐる表現について検討する。『後撰集』歌は、『源氏物語』浮舟巻における匂宮・薫の歌に摂取されており、これらの男性の歌のあと、「人笑へ」を女性の浮舟が心内語で繰り返し、この語とともに入水自殺の決意が導き出されていること、それがさらに、浮舟の出家後の心情にも影響を与えていることを指摘する。

第三編では「心の隈」を取り上げる。まず第一章では、『源氏物語』においては、心の中の秘密の部分を目指す「心の隈」をなくそうとする態度が、「世にかしこき聖」（薄雲巻）とされる夜居の僧都や、「俗聖」（橋姫巻）と称される、八の宮を慕う薫の発言に見られることに注意する。そして、特に薫について、その心情を分析することで、「心の隈」をなくそうとしつつも、それがために中の君への恋情を自制してきたことを愚かであったと後悔し、「聖」的な側面を失っていく過程を跡付ける。続く第二章では、『後撰集』の「人はかる心の隈はきたなくて清き渚をいかで過ぎけん」（恋歌五）という少将内侍の歌が女性の視点から男性の「心の隈」を問題としている点に着目しつつ、『源氏物語』の「心の隈」の用例について検討する。その結果、『源氏物語』においては、少将内侍の歌と同様に、表面的なことに惑わされずに男性の登場人物の「心の隈」を見つめようとする視点があり、それは男性にとどまらず、女性の登場人物である紫の上にまで及んでいると論ずる。

結論では、これら検討を踏まえつつ、「うつせみのから」・「心の隈」という『後撰集』では女性によって詠まれた言葉が、『源氏物語』においては、男性の登場人物の歌や発言内容、心内語に限定されて用いられている点、また、反対に、「人笑へ」は、『後撰集』では三角関係に苦しむ男性の歌において詠まれ、『源氏物語』では薫と匂宮という二人の男性の板挟みになって苦しむ浮舟という女性の心内語で用いられている点を、まず指摘する。また、「うつせみのから」・「人笑へ」・「心の隈」という三つの言葉が、『後撰集』では男性にのみ用いられているのに対して、『源氏物語』では女性に用いられていることから、『源氏物語』が「女についての、女によって作られた、女のための物語である」（玉上琢彌）という側面を持つと考察する。そして、男女が『後撰集』と『源氏物語』とでは「逆」であるということは、『源氏物語』の表現の根底には、女性は男性と同じ感覚を持ち、恥の意識のために身を捨てる覚悟も持つものだというのを、女性だけではなく、男性にも理解してほしいという願いが込められていると論ずる。最後に、和歌などの引用に関する研究においては、古注釈の時代から「同じ」であることが重視されてきたが、今後は「逆」であることに着目しての考察が必要であることとその意義を述べる。

以上、本論文は、『後撰集』の和歌と『源氏物語』の表現を比較検討することによって、『源氏物語』が『後撰集』の和歌表現を摂取したかを、登場人物の心情の分析とも絡めつつ指摘するとともに、それが単に表現の摂取にとどまらず、物語の展開にも深く寄与していて、『源氏物語』の本質に関わる方法であったことを論じている。この点が、本論文のもっとも評価すべきところであろう。

但し、本論文が取り上げた表現を『後撰集』からの摂取に収斂させる点は、『後撰集』という勅

撰和歌集から摂取したのか、個別の和歌として摂取したのかという問題が検討されておらず、問題が残る。また、結論において述べられる「女のための物語」という見方に即した理解は、玉上琢彌以来の通説をなぞった形になっていて、物足りない。しかしながら、これまでに分厚い研究史のある『源氏物語』の表現について、特に和歌の主体に着目し、従来とは異なり相違点に重きを置いて丁寧に分析するという手法を採用して、如上の結論を導き出している点、意義深いものがあると言っ
てよかろう。

以上のことを総合して、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。